弘前大学教育学部研究紀要クロスロード　第27号（2023年３月）：33―42
CROSSROADS. Fac. of Educ., Hirosaki Univ., 27（March 2023）. 33―42

生活時間と赤ちゃん人形のお世話体験を教材とした授業の有効性

The efficacy of teaching with the life time and the experience of caring for a baby doll as teaching materials

加　賀　恵　子*・三　上　真喜子**
Keiko KAGA，Makiko MIKAMI

要旨

本研究では，中学校家庭科において家族が協力・協働して家庭生活を営むことに対する認識を深めるとともに，自らの生き方を展望することができるよう「生活時間」と「赤ちゃん人形のお世話体験」を教材とした授業を構想・実践し，その効果検証を行った。家族の協力・協働が必要不可欠な赤ちゃん人形を用いたお世話体験により，生徒は家族や家庭生活に支えられてきたことを感じ取り，日常の仕事と生活のバランス，自分や他者との関係性，社会のあり方などをみつめてこれからの自分の生き方を考えるなど，心情主義に陥ることなく学びを深めることができた。手立てとして，多様な家族の設定，家族員の生活時間の可視化，統計資料を基にした社会科学的な認識の獲得，柔らかな布製の赤ちゃん人形を用いたことなどが有効に機能したと考えられた。このことにより，本教材による授業は，直接人とふれあう体験が難しい場合においても，その代替が可能であるとの示唆を得た。

キーワード：生活時間，赤ちゃん人形，体験的学習，ワーク・ライフ・バランス，ライフキャリア教育

１．背景と目的

家庭科では実践的・体験的学習活動を通して，生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することをねらいとしている。これまで家族・家庭生活の内容における体験活動としては，幼児のための玩具づくりやおやつ作り，幼児体験，幼稚園・保育園実習における乳幼児の観察やふれあい体験，家族や地域の人々へのインタビュー，高齢者体験，高齢者施設訪問における観察やふれあい体験，疑似家族によるロールプレイングなどの手だてが用いられてきている[1)]。

今改訂の中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編（家庭分野）[2)]においても，少子高齢社会の進展に対応して，幼児と触れ合う活動などを一層充実するとともに，高齢者など地域の人々と協働することについての内容が新設された。家庭や地域との連携を図って人と関わる活動を充実させることにより，生徒が家庭生活や地域を支える一員であることの自覚を促すことが示されている。さらに，（内容の取扱い）においても，生活の科学的な理解を深めるためにも実践的・体験的な活動を充実させることが大切であるとしている。

しかし，コロナ禍において，人とのかかわりをもつ体験的な学習の実施が難しい現状がある。家庭科教員は，授業で困っていることとして「実験・実習・体験学習」「対話的な学び」「地域との協働的な学び」などを挙げている[3)]。従来より，家族・家庭生活の学びの課題として，心情主義に陥りやすく理想的な家族・家庭生活に向けた努力が子どもに提示される傾向があるとの指摘がある。生活の中のさまざまな課題と結び，人とかかわる活動を通して，家族が協力・協働して家庭生活を営むことに対する認識を深めるうえでも，コロナ禍は大きな困難である。

*　弘前大学教育学部　　Faculty of Education, Hirosaki University
**　弘前大学教育学部附属中学校　　Junior High School Attached of Faculty of Education, Hirosaki University

そこで，中学校家庭科において，家族が協力・協働して家庭生活を営むことに対する認識を深めるとともに，自らの生き方を展望することができるよう「生活時間」と「赤ちゃん人形のお世話体験」を教材とした授業を構想した。中学校家庭科における「生活時間」の教材としての有効性については，自分と家族との関係性における家事労働時間を考察することにより，性別役割分業や家庭生活や社会でのアンバランスさなどから，ジェンダー平等問題の意識化へつなげる学習が可能との報告がある[4)]。また，赤ちゃん人形の教材としての価値は，大学生の男女を対象として赤ちゃん人形を本物のイメージとして様々な体験を行った「赤ちゃん人形イメージワーク」の実践においてその有効性が確認され，本物の乳幼児とのふれあいが難しい場合の補完としての活用が期待されている[5)]。さらに，疑似家族ワークによる「赤ちゃん人形プログラム」では，本物の乳幼児とのふれあい体験とは異なる意義「乳幼児への愛着感情を高め，その結果として，自らの親役割への期待を育んだり，自分の養育者としての将来像を想像したりすること」が明らかにされている[6)]。

本研究では，保護者によって育てられてきた中学生に対して，「生活時間」と「赤ちゃん人形を用いたお世話体験活動」を手だてとした学習がもたらす効果を明らかにすることを目的とする。具体的には，生徒の学びについて，以下の２点から検証する。①自分の成長や生活を振り返るとともに，家族や家庭生活に支えられてきたことを感じ取ることができるか。②日常の仕事と生活のバランス，自分や他者との関係性，社会のあり方などをみつめ，これからの自分の生き方を考えることができるか。さらに，①②を踏まえ，コロナ禍の効果的な体験活動の可能性について考察を行う。

２．方法

２．１　授業の開発

(1) 教材として用いる多様な家族と生活時間

家族・家庭生活の指導にあたっては，生徒によって家族構成や家庭生活の状況は異なることから，各家庭や生徒のプライバシーに配慮しなければならない。K社の教科書では家族関係の変化が取り上げられ，「家族のあり方や暮らし方はさまざまである」ことにふれている[7)]。T社の教科書には，多様な家族の写真が掲載され，本文には「家族の形態や生活の仕方などが違っても，家族の生活の場として家庭があ」ると説明されている[8)]。KT社の教科書には，ファミリー・アイデンティティに関するワークが紹介され，本文には「家族や家庭の形はさまざまで，それぞれ個性のある生活を営んでいる」と記述されている[9)]。いずれも多様性を重視する表現ではあるが，自分が育てられてきた家族のあり方や暮らし方以外を想像することは難しいと考えられる。

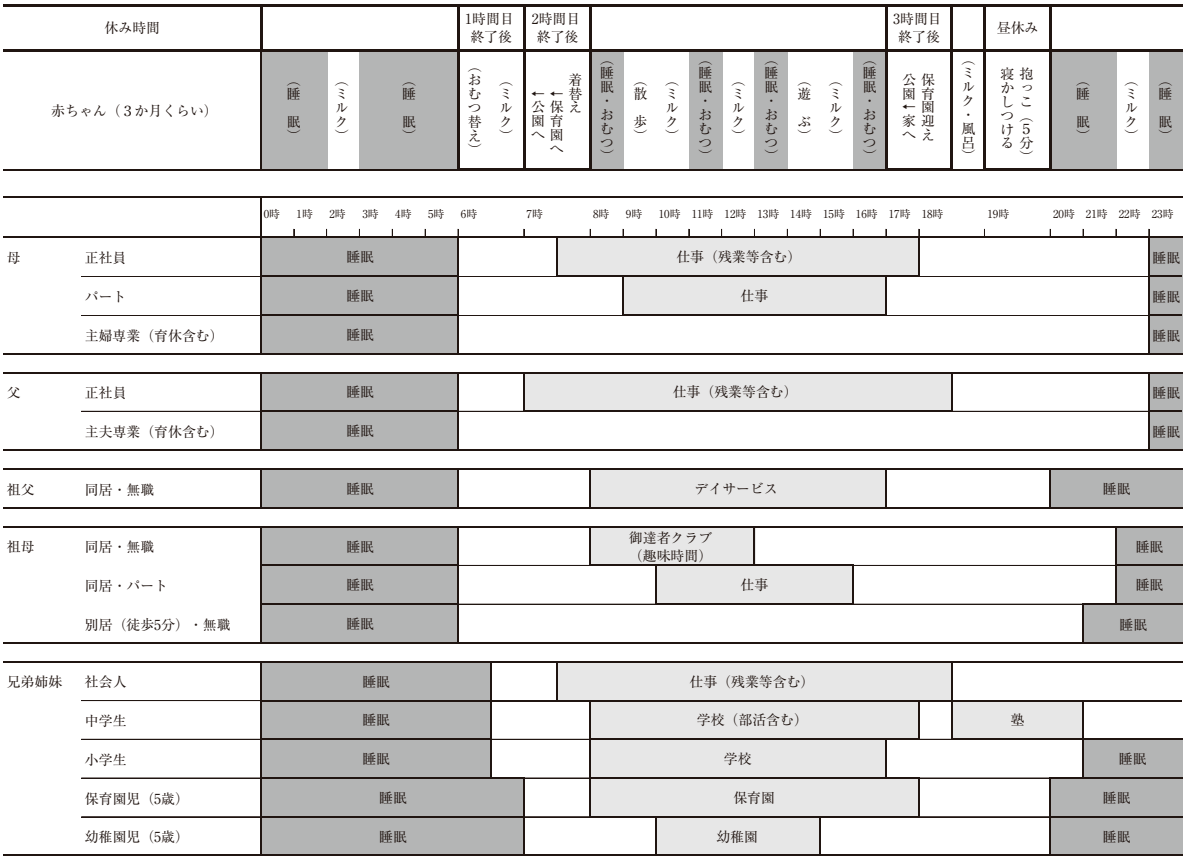
図１　多様な家族

そこで，授業では，生まれて３か月の赤ちゃんがいる多様な家族を提示することにした（図１）。家族構成が多様であるだけでなく，生活の仕方も多様であることを生活時間から読み解くことができるよう職業や就業形態も複数設定した。その際，先行研究である鎌田らの分類に従い生理的生活時間，社会的・文化的（拘束）時間，社会的・文化的（自由）時間，家事労働時間，収入労働時間の５つの生活時間行動分類を踏まえて，表１に示すような生活時間表を作成した[4)]。生理的生活時間については，赤ちゃんの生活を想像することは難しいと考え，赤ちゃんのみ食事や入浴などの内容も記載したが，他の家族員については睡眠時間のみとした。また，家事労働時間や社会・文化的（自由）時間は，家族や家族員によって様々な場面が想定されるため，あえて記述を省いた。この表を活用することで，家族員の一日の生活の様子が可視化できると考えた。

(2) 教材として用いる赤ちゃん人形

新生児を模した赤ちゃん人形は，小・中・高等学校の家庭科等で用いられるほか，大学の看護教育や保育・幼児教育等でも用いられることがある。赤ちゃん人形の中には，様々な理由で泣き，適切な対応をすることで泣き止んだりするよう制御された高機能人形もあり，野口によれば育児技術の習得とともに養護性を高める効果があることが示唆されている[10]。しかし，本研究では，赤ちゃん人形を活用して育児技術の習得を図ることが目的ではない。疑似家族による「赤ちゃん人形のお世話体験」という体験的な学習の効果を明らかにすることが目的である。布製で柔らかくかわいい外観を持った赤ちゃん人形は，児童においては自分が大切に育てられてきたことを確認したり，親の想いや願いを感じさせたりするとの報告もあることから[11]，本研究の目的に迫ることができると考え，身長約50cm，体重3000g，首が座っていない生後3か月の赤ちゃんを想定した布製の手作り赤ちゃん人形を用いることにした。

表1　多様な家族を構成する家族員の一日の生活時間



(3) 生活時間と赤ちゃん人形のお世話体験を教材とした授業の概要

授業は，題材「自分の未来を切り拓く―育てられている時代に育てることを学ぶ―」（5時間扱い）の1・2時間目を小題材として位置付けて実践した。題材の指導計画は，以下に示すとおりである。

時数	学　習　内　容
1	多様な家族の仕事と家庭生活の実際と，それを支える社会のしくみを知ろう
2	家族の役割を尊重した赤ちゃんのお世話計画を考えよう
3・4	赤ちゃんとパパ・ママとふれあって学ぼう（地域の乳児親子とのふれあい体験）
5	人生のさまざまな役割について考えよう（ライフキャリア講座：学年家庭科）

①小題材の目標

○多様な家族や男女共同参画社会についての理解を深め，家族が協力して家庭を築くことの重要性に気付くとともに，それらに係る技能を身に付けている。（知識・技能）

○自己や家族のワーク・ライフ・バランスについて思考を深め，お互いを尊重しながら共に生きるための方法を工夫して考えるなど，解決する力を身に付けている。（思考・判断・表現）

○お互いを尊重しながら共に生きるための方法を，自分の家庭生活に取り入れようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

②小題材の展開

段階	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	留意点・評価の場面と方法
	―1時間目―		
導入 5分	○家族のありようは一様ではなく，多様な家族があることを確認する。	○様々な構成員による多様な家族について知る。 • 核家族，拡大家族 • 同性パートナーと養子の家族 • ステップファミリー	• 生徒にとって馴染みのない家族関係については，PowerPointのスライドでイラストを使って説明し，イメージしやすくする。
展開 40分	○中学生のワーク・ライフ・バランスのとれた将来に対する希望と現実とのギャップの存在や家庭を支える社会の仕組みを示す。 学習課題　多様な家族の仕事と家庭生活の実際と，それを支える社会のしくみを知ろう	○誰もが仕事と家庭生活を大切にバランスよく生活することの難しさがあることや，これを支えようとする社会のしくみについて知る。 • 夫と妻の家事関連時間には偏りがある。 • 共働きでも。妻の家事関連時間は夫より多い。 • 育休取得率は男性も増えているがまだ女性の方が高い。	• レディネス調査結果と統計資料を示して，そのギャップに気付かせる。 • 家庭はその機能を果たすために，様々な社会の仕事や男女共同参画基本法や改正育児・介護休業法などの社会のしくみに支えられていることにふれる。
	○家族全員がワーク・ライフ・バランスを実現させるためにはどんなことが考えられるか，話し合い，発表させる。	○ワーク・ライフ・バランス実現のための方法を，自分達の家族形態をもとに班で考え，発表する。 • 母と父が仕事をしている間は，無職の祖父に子どもの面倒を見てもらう。	• グループに赤ちゃん人形を配布し，名前をつけさせる。その際，自分の名前の由来を発表させる。 ※家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があることを理解するとともに，それにかかる技能を身に付けている。（知識・技能）（発表）
まとめ 5分	○次時の連絡（赤ちゃんのお世話計画を立てて実践する）		
	―2時間目―		
導入 5分	○前時の復習をする。 学習課題　お互いを尊重しながら赤ちゃんを育てるにはどうすればいいだろう？	○教師の問いかけに答える。 • 赤ちゃんの名前を決めた。 • 家事や育児は妻の方がやっていることを知った。 • 共働き世帯が増えていることを知った。	• 授業前にクロムブックに前時に決めた赤ちゃんの名前を記入させる。
展開 35分	○泣いている赤ちゃんの写真を示し，理由を考えさせる。	○写真を見て発表する。 • おなかが空いている。 • おむつを替えてほしい。 • お腹が痛い。 • だっこしてほしい。	

	○乳児の発達を支えるための家族や周囲の役割を確認する。	○家族や周囲の大人が赤ちゃんの思いを推し量ることで，命の安全を保障し，安心して生活できることを知る。	• 赤ちゃんにとって支えがないことは，命の問題に直結することを確認する。
	○生徒に赤ちゃんの一日を想像させる。	○周囲と話し合う。 • 一日の半分以上を寝ている。 • 大人と同じ３回食事をする。 • 日中はずっと寝ている。	
まとめ 10分	○赤ちゃんの一日を説明した後，家族の一日の生活をイメージしながらお世話計画を立てさせる。	○一日の生活時間が記された資料を基にお世話計画を立てる。 • 正社員の母は身支度に時間がかかるから，朝のおむつ替えとミルクは父がやる。 • 誰もお迎えにいけないので○○のママに迎えを頼もう。	• それぞれの役割の一日の時間の使い方が記された資料を配り，それをもとに赤ちゃんの一日について確認する。 • 赤ちゃんが家族に加わることで，家族の時間の使い方も変化することをおさえる。
	○家族ごとのお世話計画を発表させる。	○他の家族の計画を聞き，工夫した点をメモする。	
	○赤ちゃんのお世話の流れを説明する。	○説明を聞き，分からない部分は質問する。 担当者は， • 一時間目が終わったら，家庭科室でおむつ替えをする。 • 二時間目が終わったら，保育園もしくは公園（図書室）へ連れていく。 • 三時間目（昼食）が終わったら，保育園もしくは公園（図書室）へお迎えに行く。 • 昼休みに，五分間抱っこしたのち寝かしつける。	• 一時間目終了後の休み時間からお世話に取り組むことを伝える。 • 公園と保育園についての説明をする。 • 自己や家族のワーク・ライフ・バランスを考え，お互いを尊重した計画になるよう促す。 • 家族の誰か一人に負担がかからない，自分以外の人の生活時間も考えるように促す。 • クロムブックに記入させる。 • 「お世話メモ」には，実際にしたお世話について一言コメントを残すように伝える。 • 一日のお世話が終わったら，ワークシートに振り返りや感想を記入するよう伝える。
	―休み時間―	○お世話計画に従って，各時間の役割担当者が赤ちゃんのお世話を行う。 ○ワークシートに振り返りや感想を記入する。	※家族が協力して家庭を築くことの大切さに気付くことができる。（知・技）〈ワークシート〉 ※お互いを尊重しながらともに生きるための方法を工夫して考えている。（思・判・表）〈ワークシート〉

２．２　授業実践による効果検証

(1) 授業の対象および実施時期

授業実践は，2022年８下旬～９月中旬に，弘前大学教育学部附属中学校の３年生５クラス（157名）を対象に，各クラス２日間（50分×２コマ＋休み時間）にわたって実施した。

(2) 分析対象

①題材の学習後の質問紙調査の結果

【調査の概要】　※所属機関の倫理委員会の承認を受けている。

時期は2022年11–12月で，QRコードの読み込みによるWeb調査により実施した。回答数157，有効回答数143，有効回答率91.1％であった。調査項目は，授業の振り返り18項目（授業への参加度，知識・技能の習得７項目，情意への影響２項目，家族に支えられてきた自分への気づき２項目，赤ちゃんふれあい体験への影響２項目，社会のあり方や将来への展望５項目）であった。

②模擬家族によるお世話体験シートの記述内容

③ワークシートの記述内容

３．結果と考察

３．１　質問紙調査

赤ちゃん人形を用いたお世話体験への取組の評価結果を図２に示す。「グループの仲間と協力して行うことができた」「子育て中の保護者の気持ちを考えることができた」の２項目に対して，いずれも９割強の生徒が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に回答していた。また，この２項目と，題材学習後の質問紙調査の各項目との相関をみたところ（表２），「授業に積極的に取り組むことができた」との間に強い正の相関が認められた（r=0.72）（r=0.77）。このことから，赤ちゃん人形を用いたお世話体験が，生徒の興味・関心を高め積極的に活動に取り組むことを促すうえで有効であることが明らかになった。また，小題材で「子育て中の保護者の気持ちを考えることができた」ことと，その後の赤ちゃんとのふれあい体験において「参加してくれた保護者の話を興味をもって聴くことができた」との間に強い正の相関が確認できた（r=0.74）。このことから，赤ちゃん人形を用いたお世話体験活動は，その後の赤ちゃんふれあい体験をより一層充実させることにも有効であると考えられる。その他の項目についてもすべて正の相関が示され，赤ちゃん人形を用いたお世話体験活動は，本題材の学習に対して一定程度の有効性を有すると考えられる。

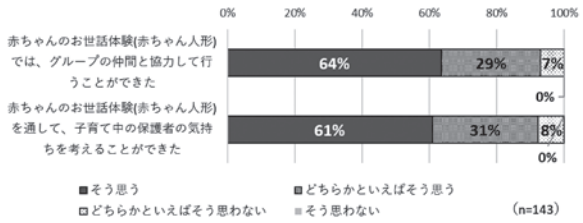


図２　赤ちゃん人形を用いたお世話体験への取組評価

表２　赤ちゃん人形を用いたお世話体験との相関

	授業への参加度、知識・技能の習得							情意への影響		家族に支えられてきた自分への気づき		赤ちゃんとのふれあい体験への影響		社会のあり方や将来への展望				
	赤ちゃんのお世話体験（赤ちゃん人形）では，グループの仲間と協力して行うことができた	赤ちゃんのお世話体験（赤ちゃん人形）を通して，子育て中の保護者の気持ちを考えることができた	授業に積極的に取り組むことができた	授業の内容を理解できた	授業を通して，新しい知識を得ることができた	授業では，他者の意見を尊重することができた	授業では，自分の感じたことや考えたことを発言することができた	授業を通して，幸せな気持ちになった	授業を通して，優しい気持ちになった	授業では，自分をここまで育ててくれた保護者を思い出すことがあった	授業を通して，自分を育ててくれている保護者への見方が広がった	赤ちゃんとのふれあい体験では，参加してくれた保護者の話を興味をもって聴くことができた	赤ちゃんとのふれあい体験では，赤ちゃんや保護者，サポーターと気持ちの良いコミュニケーションをとることができた	社会で子どもを育てることについて考えることができた	職業生活，家庭生活，地域生活と自分とのかかわり方について考えることができた	授業を通して，人には果たさなければならない様々な役割があることがわかった	授業を通して，自分の将来についていろいろな考えが湧いてきた	授業を通して，将来何とかやっていけると思った
赤ちゃんのお世話体験（赤ちゃん人形）では，グループの仲間と協力して行うことができた	—	**0.71**	**0.72**	0.62	0.64	**0.78**	0.47	0.62	0.65	0.57	0.67	0.68	0.68	0.63	0.70	0.60	0.64	0.45
赤ちゃんのお世話体験（赤ちゃん人形）を通して，子育て中の保護者の気持ちを考えることができた	**0.71**	—	**0.77**	0.58	0.63	0.70	0.49	0.64	0.66	0.51	0.59	**0.74**	0.65	0.69	0.69	0.65	0.65	0.42

スピアマンの順位相関行列　すべて $p<0.01$　(n=143)

３．２　家族の生活時間をイメージしながら実践した赤ちゃん人形を用いたお世話体験

(1) 赤ちゃん人形を用いたお世話体験計画の工夫

小題材の１時間目「多様な家族の仕事と家庭生活の実際と，それを支える社会の仕組みを知ろう」において，生徒にはレディネス調査結果や統計資料（夫と妻の家事関連時間の比較，共働き家庭の比率，男性育休取得率の推移等）を基に，仕事と生活の両方を大切にバランスよく生活するためには難しい現実があることや，これを支えようとする社会のしくみ（男女共同参画基本法，働き方改革，改正育児・介護休業法，家事

の社会化等）について学んだ。２時間目「家族の役割を尊重した赤ちゃんのお世話計画を考えよう」において，資料（表１）を基に赤ちゃんの世話計画を立てる際には，１時間目に獲得した社会科学的な認識を想起させながら，以下の留意点を伝えた。○自己や家族のワーク・ライフ・バランスを考え，お互いを尊重した計画にすること。○家族の誰か一人に負担がかからない，自分以外の人の生活時間も考えること。

生徒が考えた具体的な工夫を表３に示す。支えがないと生きていけない赤ちゃんの生活を家族生活の中心に置き，「お互いを尊重しながら赤ちゃんを育てるにはどうすればいいだろう？」という家族の課題解決に向けてさまざまな工夫が見られた。家族員が協力することは当然のことながら，具体的に「できる限り自分のことは自分でする」「登校や出勤などに遅れないように早めに行動する」という生活自立力や生活管理力の重要性に気づいた意見も出されていた。また，個々の家族員のワーク・ライフ・バランスについても，祖父母の心身の健康維持，家族が一緒の時間を創ることや個人の時間を確保することの重要性にも言及していた。さらに，必要に応じて外部の資源を活用することや社会の協力を得るなどの工夫も示されている。家族の協力・協働が必要不可欠な課題の解決に向けて，資料によって家族員の一日の生活時間を実生活に近い形で可視化できたこと，グループ内で家族の役割を分担したことで異なる立場から話し合いができたこと，また１時間目に獲得した社会科学的な認識の活用がなされていたと考えられる。

表３　お世話体験計画の工夫

家族の協力	• 父も母もどちらも家事をする。 • 小中学生も家事をする。 • 祖父母にも協力してもらう
	• できる限り自分のことは自分でする。 • 年齢や仕事によって無理のないくらいで分担する。 • 登校や出勤などに遅れないように早めに行動する。 • SNSやネット情報を活用する。
ワーク・ライフ・バランスを意識	• 祖父母は体力づくりにも心の健康にもつながる。 • 家族が一緒の時間を創る。（ご飯を一緒に食べるなど） • 全て育休中の母や専業主夫がやるのが当たり前ではない。 • 父が育児をするときは、母は自分の時間にする。 • 会社の仕事をテレワークにする。
外部資源の活用 社会の協力	• 知り合いや親せきにも助けてもらう。 • 家事を外部化する（人を雇う⇨ベビーシッターや家政婦） • 便利家電を利用する。（お掃除ロボットなど） • 会社の仕事をテレワークにする。 • 勤務時間を変更してもらう。 • 育児休暇をもらう。

(2) 模擬家族によるお世話体験シートの記述内容

小題材２時間目の授業は，授業日の１時間目に実施している。生徒は，授業内に立てたお世話計画に従って，休み時間ごとにお世話体験に取り組んだ。表４は，Ｅ組の生徒がお世話体験ののちに記したお世話メモの一覧である。

生徒のお世話メモの多くは，「首がグラグラしていて不安定だったので怖かった」「運んで歩くときも首を支えるのが大変」「３kgが予想以上に長時間持つとキツイ」「手足が小さすぎて骨折れてしまいそうで怖い」「服を着せたけど，腕も通しにくくて大変」といった赤ちゃん人形に関わる感想であった。実際に抱っこしたりあやしたりする中で，重さを体感したり不安に思ったりしたことで「本当の赤ちゃんだったら，もっと大変だろう」「親って大変だな」「全国のお父さんはすごいなあ」など，児童を対象にした先行研究[11] で示されたように，体験を通して自分が大切に育てられたことや親の想いなどの気づきにつながっていたと言えよう。首の座っていない柔らかな布製の赤ちゃん人形を用いたことによる効果が確認できた。

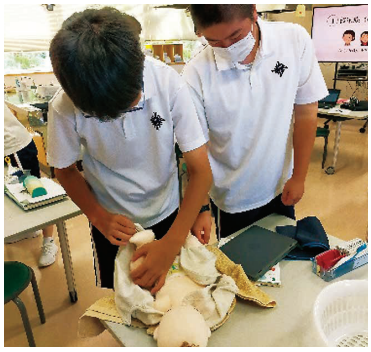


表４　赤ちゃん人形を用いたお世話体験実施後の感想

附属中休み時間	1時間目終了の休み時間	２時間目終了の休み時間	昼食終了後すぐ	昼休み
赤ちゃんの生活	おむつ替え（家庭科室）　（ミルク）	着替えをさせて →保育園へ →公園にお散歩へ（図書室）	保育園に迎え 公園のお散歩から →家へ（家庭科室）	抱っこ（５分） 寝かしつける（家庭科室）
【１班】核家族（母子家庭） 家族メンバー：A、B	お世話担当（中学生B）	お世話担当（母A、中学生B）	お世話担当（母A）	お世話担当（母A）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（嵐くん） 由来：嵐のようなスターになってほしいから	＜お世話メモ＞ 付け方がわからなくて、思っていたよりも難しかった。慎重に、優しくあつかうことができた。	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんを机の上に置くときに頭をぶつけないように慎重においた。また、他の赤ちゃんとも仲良くなれたと思う。	＜お世話メモ＞ みんなに可愛い赤ちゃんだねと言われて嬉しかった。図書室に預かりに行くとき、赤ちゃんはとてもうれしそうだった。	＜お世話メモ＞ ３キロもあって首もすわってないから、抱っこするのは難しかった。着替えるときも腕がうまく曲がらなかったりして実際の赤ちゃんはもっと大変なんだろうなと思った。
【２班】核家族（新婚家庭） 家族メンバー：A、B	お世話担当（父A）	お世話担当（母B）	お世話担当（母B）	お世話担当（父A）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（　くうちゃん　） 家族の思い：なんでも食べるように、色々なものを吸収して、それを自分の力に変えて成長してほしい。 性格：寝るの大好き！	＜お世話メモ＞ 思っていたより、おむつを変えるのが難しかった。おむつを変えてるときに泣いたりしたら、とても大変だと思ったし、スピーディーにやらないといけないなと思った。	＜お世話メモ＞ 首が座っていないので頭を持ちながらやらなければいけなかった。手足が小さすぎて骨折れてしまいそうで怖かった。なれなければいけないとおもったし、実際はもっと話しかけてあげながらやることも大事だと思った。	＜お世話メモ＞ **家族（親達）の夕食時間と被っていた。お父さんも会社から帰ってきたばかりだし、疲れているから夕食は母が作らないといけないけれど食事は一緒にとりたいから、食べるのと世話をするのとで役割を分けながらやらければいけないと思った。２人だと人手が足りないなと思った。**	＜お世話メモ＞ 長時間抱すると腕が鍛えられそうだなと思った（正直きつかった）。首が座っていないから、慎重にやらないといけないなと思った。着替えも思うように動かせないから、難しかった。
【３班】核家族 家族メンバー：A、B、C、D	お世話担当（中学生C、保育園児D）	お世話担当（父B）	お世話担当（母A）	お世話担当（母A）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（　真奈斗くん　） 名前の由来：誠実に育ってほしい	＜お世話メモ＞ ・弟のオムツ替えはしたことがあったので、簡単に行うことが出来た。しかし、久々すぎて正しく出来ているかどうかが不安になった。 ・Ｃさんの手際が良くてすごいなーと思った。次にやる機会があったらひとりでできるようにしたい。（D）	＜お世話メモ＞ 連れて行くだけなら簡単だと思っていたけど、休み時間で人も多かったので、首をキープしたまま持っていくのはけっこう大変でした。保育園でスヤスヤ眠っていました。	＜お世話メモ＞ 重いので、運ぶのが大変だった。ベビーカーのありがたさに気づいた。	＜お世話メモ＞ 首が思ったより据わってなくて、不安だった。本当の赤ちゃんだったら５分では泣き止まないと思うと、親って大変だなって思った。
【４班】核家族（同性パートナー） 家族メンバー：A、B、C	お世話担当（父二人、A、B）	お世話担当（正社員の父A）	お世話担当（正社員の父A）	お世話担当（小学生C）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（　ワカタケル　） ※男の子　ワ「once again」カ「カリブ海のように大きな心を持った」タ「タイソン・チャンドラーに似てる」ケ「蹴鞠が得意」ル「Look at me.」	＜お世話メモ＞ おむつを取り替えたことがまったくないので、どうやってすればいいのかわからなかったので、Ａさんが知っていたので、教えてもらいながらがんばってつけることができた。	＜お世話メモ＞ 服を着させるのが難しかった。3kgくらいの赤ちゃんをずっと持っているのは腕が痛いと思った。	＜お世話メモ＞ 仕事帰りに迎えに行った。腕に首を添わせた。首が動かないように連れ帰るのが難しかった。	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんはまだ生きている様子。夢と希望を抱いてすやすやと眠っていた（だろう）。保育園の先生方に可愛がられていてうれしそうだった。
【５班】拡大家族 家族メンバー：A、B、C、D、E	お世話担当（家族全員）	お世話担当（家族全員）	お世話担当（家族全員）	お世話担当（家族全員）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（剛子（たけし））※女の子　金剛に輝く丈夫な女の子になってほしい	＜お世話メモ＞ 今日は５分ぐらいしか抱っこしなかったけれど実際に泣き止むまで抱っこしてるとなると何時間となるのかなぁ。抱っこするときになんとなく揺らしていたけどもしかしてあんしんするのかな？	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんの服が特徴的だったから、着せるのに苦労したけど、班のみんなでたけしちゃんの服を協力して着させることができたので良かった。	＜お世話メモ＞ 本番はおむつを変えるときは色々注意しないと！そして、すばやく！	＜お世話メモ＞ 「３キロ」が予想以上に長時間持つとキビシイことを知りました。５分でも腕が危ないことになるのに、なかなか寝つかないときとか、お父さん・お母さん大変そうだなぁと思いました。
【６班】拡大家族（父子家庭） 家族メンバー：A、B、C、D、E	お世話担当（祖母E）	お世話担当（祖母E）	お世話担当（祖父D）	お世話担当（祖父D）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（大地くん）　大地のように大きく育ってほしいから	＜お世話メモ＞ 人形が結構重くて、リアルだったのがびっくりでした。	＜お世話メモ＞ 送り迎えだけでけっこう疲れてしまったので手伝ってあげるべきだと思いました。	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんを抱っこしながら歩いたことがあまりなかったので首の位置や落とさないように気をつけました。	＜お世話メモ＞ 首が座っていなくて３kgもあったので抱っこが大変だった。首を安定させたまま抱っこで寝かしつけつるのも疲れた。もし泣いていたらもっと時間がかかって負担がかかると思った。
【７班】核家族＋別居祖母 家族メンバー：A、B、C、D、E	お世話担当（中学生C）	お世話担当（母B）	お世話担当（祖母E）	お世話担当（父A）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の★名前（かるを（かるちゃーん♡）） 多文化共生社会を生き抜いていく強い心を持つ！性格…無口	＜お世話メモ＞ 初めておむつを変えてみて、おむつを変えるのには班の人たちに協力してもらって変えることができたけど赤ちゃんを首をよい角度に保っておむつを変えるのはとても難しいと思った。やっぱり「わかる」と「できる」は違うんだなあ、と思った。	＜お世話メモ＞ 服を着せたけど、本当の赤ちゃんなら、ためらうなどしてやりにくいと思いました。腕も通しにくくて大変でした。運んで歩くときも、首を支えるのが大変でした。頭に肘をやるとうまく抱っこできるとわかりました。もうちょっと慎重に扱っていこうと思いました。でも、可愛かったです！	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんを抱っこしながら歩くとき、首がグラグラしていて不安定だったのが怖かった。あやしているときも５分間だったら疲れないけど実際の赤ちゃんを寝かしつけたりするときはもっと長い間重い赤ちゃんを抱っこしていなきゃいけないので大変だなと感じた。	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんはとてももろい構造をしていて取り扱いが大変だった。りあるべいびー（リアルベイビー）と合うときは優しく接したい。
【８班】拡大家族（ステップファミリー） 家族メンバー：A、B、C、D、E、F	お世話担当（中学生D）	お世話担当（母B）	お世話担当（祖母F、小学生E）	お世話担当（父A）
●赤ちゃんお名前・名前に託した家族の名前・日和（ひより）優しくて明るい子に育つように	＜お世話メモ＞ 私は今日、おむつを変えました。おむつのはかせ方を知らなかったので困りましたが、なんとかできました。ぎこちなかったので赤ちゃんも困ったと思うので次はもっとスムーズに変えられるようにしたいです。	＜お世話メモ＞ まず服の着せ方がわからず、腕を通すことや足を通すところのボタンに苦戦しました。抱っこして運ぶときには頭をちゃんと支えることに気をつけました。赤ちゃんようの服の仕組みがわかって面白かったです。次回はもっとスムーズになるようがんばります。	＜お世話メモ＞ 赤ちゃんと移動するとき赤ちゃんのバランスを保ちながらの移動が大変だった。あまり頭を揺らさないようにしないといけないから難しかった。実際の赤ちゃんにはあまり負担をかけてはいけないと思った。	＜お世話メモ＞ 自分なりにだいぶがんばれたと思いました。首がつらそうだな、と思いました。全国のお父さん方はすごいなあと思うほど大変でした。着替えさせるのも難しかったです。抱っこするのが意外と腕にきました。たった５分でも意外ときついことを知りました。

太字・下線　筆者加筆

(3) ワークシートの振り返りの記述内容

お世話体験終了後，学習の振り返りを記述させた。提出されたワークシートは123，記述数は166であった。記述内容は，５つのカテゴリー「家族の協力や工夫，多様性への気づき」「ワーク・ライフ・バランスや社会のあり方」「赤ちゃん人形やお世話体験」「保護者への想い・感謝」「その他」に分けることができた（表５）。以下，本研究の視点から記述内容を分析する。

○視点①：自分の成長や生活を振り返るとともに，家族や家庭生活に支えられてきたことを感じ取ることができるか。

赤ちゃん人形を用いたお世話体験は，授業間の短い休み時間を利用しての活動であった。つまり，生徒にとってリアルに仕事（学習）と生活の両立を目指した体験活動であっただけに，時間をやりくりしながら子育てを行うことが決して容易ではないこと，そのようにして育てられてきた自分がいること，育ててくれた保護者への感謝などの記述が認められた。このことは，表２に示すように，赤ちゃん人形を用いたお世話体験と家族に支えられてきた自分への気づき２項目との間に，正の相関が認められていることからもその効果が確認できる。それぞれの生活時間を尊重しながら，家族員で協力して赤ちゃんのお世話をする中で，時間をやりくりしながら育ててくれた保護者の姿を思い浮かべたり，感謝の思いを抱いたりしたものと考えられる。

○視点②：日常の仕事と生活のバランス，自分や他者との関係性，社会のあり方などをみつめ，これからの自分の生き方を考えることができるか。

表２に示すように赤ちゃん人形のお世話体験と自分の将来への展望にかかわる項目との間には，正の相関が認められている。多様な家族による赤ちゃん人形を用いたお世話体験が，進路選択を前に職業生活のことのみに目が向きがちな中３生にとって，職業生活，家庭生活，地域生活に目を向けさせ，将来への見方を広

表５　小題材の振り返りの記述

カテゴリー	出現数	記　述　例
家族の協力や工夫、多様性への気づき	44	• 家族の役割分担など話し合いでうまくできなかったところもあったが、話し合いをすることでよりよい方法を見出すことができるので、家族の話し合いは大事だと思った。 • 本来の家族でも一人ひとり苦手なところがあると思うので、お互いに苦手をカバーし合えるような家族を作ることが大切だと思った。 • それぞれの家族の形や特徴に合わせてベストのものを作っていくことが大切だと思った。
ワーク・ライフ・バランスや社会のあり方	35	• 赤ちゃんが来ることで家族の生活リズムが大きく変わったので驚いた。いつものこと＋赤ちゃんの世話を毎日やるのは大変。親が仕事＋子育てだと負担がすごい。 • 親も当然仕事以外の趣味の時間があるので，子供よりも我慢しないといけないが、そういった休みも必要だから、ワーク・ライフ・バランスについて考えることは大切だ。 • 普段何気なく生活していたが、時間割などのスケジュールを視覚化すると空いている時間をどれだけ有効に使うかで育児の時間を最小限に抑えることができ、ワークライフバランス実現に繋がると思った。
		• 未だに男は仕事、女は家庭という固定概念があるのだとグラフや話し合いを通じて感じた。家族内で家事、育児を分担することも含め、社会などの育休制度推進や周りの人のサポートも大切だと思った。 • 公民の単元とも関連があって深く考えられた。ワーク・ライフ・バランスを維持するためには、個人や家族の努力だけでなく、社会全体でのあり方を変えていく必要があると思った。
赤ちゃん人形やお世話体験	34	• 一緒にいるうちにとても愛着がわいて優しい気持ちになりました。 • 実際の赤ちゃんではなくても、本物の赤ちゃんのように扱うことで、実際の場面を想像しやすかった。 • 赤ちゃんを抱いたり遊んだりあやしたりすることはあったけど、世話をすることはなかったので大変だった。
保護者への想い・感謝	22	• 体験は大変だったけど、授業中も赤ちゃんのことが頭のどこかにあって、次行かないととか気にしなきゃいけなかったので、毎日やっている父や母は大変だなと思った。 • 自分のために時間を使っていてくれたのだと思い、感謝の気持ちでいっぱいになりました。
その他	31	• とても良い経験ができた。 • 将来に生かしたい。

げて様々な役割を果たさなければならないことの自覚を促すことにつながっていたと考えられる。また，振り返りの記述からは，これらを実現させるためには，家族の話し合いや協力が必要であり，自分たちが工夫して作っていくものであることへの気づきが認められた。少数ではあるが，社会の現状と課題を捉えたうえで，ワーク・ライフ・バランスを考えた将来の生き方や社会のあり方に言及する記述もあった。このことから，今回の小題材を３時間扱いとし，体験後に感じたことや考えたことを話し合わせるなど丁寧な振り返りを行うことで，より多くの生徒の思考を深めていくことができたのではないかと考えられた。実践的・体験的学習を効果的に展開するためには時間の保証は必要不可欠であり，今後の課題である。

４．まとめと課題

本研究では，中学校家庭科において家族が協力・協働して家庭生活を営むことに対する認識を深めるとともに，自らの生き方を展望することができるよう「生活時間」と「赤ちゃん人形のお世話体験」を教材とした授業を構想・実践し，その効果検証を行った。

家族の協力・協働が必要不可欠な赤ちゃん人形を用いたお世話体験は，生徒にとってリアルに仕事（学習）と生活の両立を目指した体験活動であった。生徒は自分の成長や生活を振り返るとともに，家族や家庭生活に支えられてきたことを感じ取り，日常の仕事と生活のバランス，自分や他者との関係性，社会のあり方などをみつめてこれからの自分の生き方を考えるなど，心情主義に陥ることなく学びを深めることができていた。手立てとして，多様な家族の設定，家族員の生活時間の可視化，統計資料を基にした社会科学的な認識の獲得，柔らかな布製の赤ちゃん人形を用いたことなどが有効に機能したと考えられた。このことにより，「生活時間」と「赤ちゃん人形のお世話体験」を教材とする本授業は，コロナ禍等直接人とふれあう体験が難しい場合においても，その代替が可能であるとの示唆を得た。比較検証を今後の課題としたい。

本稿は，JSPS科研費（科研番号：18K13158）の助成を受けた研究成果の一部である。

【参考・引用文献】

１）全国家庭科教育協会（2001）．体験的学習の充実―小・中・高校の実態―．
２）文部科学省（2017）．中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編，69–70.
３）全国家庭科教育協会（2022）．令和３年度家庭科教育の充実に関する調査～新学習指導要領全面実施とコロナ禍での課題～，29.
４）鎌野広子・中山節子（2021）．中学校家庭科における生活時間を教材とした授業実践．日本家庭科教育学会誌第64巻第２号，125–134.
５）塚本美由紀（2009）．「赤ちゃん人形イメージワーク」の実践と検討―保育内容の視点から教員志望学生を対象に―．芦屋大学論叢（29），29–42.
６）伊藤篤・塚本美由紀（2015）．子育てひろばにおける青少年の養護性育成を目指した体験学習の意義：「０歳児ふれあい体験」と「赤ちゃん人形プログラム」の比較．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，9(1)：57–71.
７）中学校技術・家庭科（家庭分野）教科書（2021）．家庭703「技術・家庭　家庭分野　生活の土台　自立と共生」．東京：開隆堂出版．24.
８）中学校技術・家庭科（家庭分野）教科書（2021）．家庭701「新しい技術・家庭　家庭分野 自立と共生を目指して」．東京：東京書籍．176.
９）中学校技術・家庭科（家庭分野）教科書（2021）．家庭702「New技術・家庭　家庭分野　くらしを創造する」．東京：教育図書．14–15.
10）細谷里香（2002）．赤ちゃん人形を用いた体験学習の心理的効果―学生の経験に着目して―．兵庫教育大学研究紀要第60巻．23–32.
11）塚本美由紀・荒木紀幸（2006）．「赤ちゃん人形ワーク」に関する研究―(1)赤ちゃん人形の製作―．神戸親和女子大学児童教育学研究，25，123–135.